

ごあいさつ

(会長) 山岸 哲

あけましておめでとうございます。私たちの学会の役員および各種委員は学会規約により2年ごとに改選されることになっております。そして、すでに1996年1月1日から新しいスタッフによって本学会は運営されておりますから、学会にとってもまさにお正月を迎えたこととなります。「学会のお正月」に当たり、これから2年間、日本鳥学会をお世話いただく方々をこの紙面をお借りしてご紹介したいと思います（敬称は略させていただきます）。



- 副会長 藤巻裕蔵
- 常任評議員 阿部 學、江崎保男、樋口広芳、山岸 哲、藤巻裕蔵
- 評議員 阿部 學、江崎保男、藤巻裕蔵、福田道雄、長谷川博、樋口広芳、石田 健、唐沢孝一、松岡 茂、森岡弘之、中村浩志、中村登流、中村 司、上田恵介、山岸 哲、
- 監事 中村和雄、樋口行雄
- ニュース編集 江崎保男（責任者）、水田 拓
- 基金運営委員 樋口広芳、正富宏之（委員長）、森岡弘之、中村登流（副委員長）、中村 司、山岸 哲
- 編集委員 青木 清、江口和洋（副委員長）、藤巻裕蔵、樋口広芳、石居 進、松岡 茂、森岡弘之、中村浩志（委員長）、斎藤隆史、立川 涼、上田恵介、浦野栄一郎、綿貫 豊
- 鳥類保護委員 阿部 學（委員長）、藤巻裕蔵、福田道雄、樋口広芳（副委員長）、唐沢孝一、中村 司、山岸 哲
- 目録委員 江口和洋、藤巻裕蔵（委員長）、石田 健、川路則友、黒田長久、松岡 茂、森岡弘之、中村一恵、中村登流、上田恵介、浦野栄一郎、綿貫 豊、柳沢紀夫
- 用語委員 阿部 學、長谷川博、黒田長久、正富宏之、松岡 茂、森岡弘之（委員長）、中村浩志、中村登流、中村 司、山岸 哲
- IWRBJ（国際水禽湿地調査局日本委員会）委員 樋口広芳
- 日本学術会議動物科学研究連絡委員会第16期委員 山岸 哲
- 事務局員 黒島妃香

巻頭言

ところで私は、前会長の森岡氏より会長職を引き継いだ後、これとって新しいことをしてきたわけではございません。しかし、(1)会誌発行の遅れを取り戻す、(2)広い学問分野の連携を計る、(3)保護委員会を充実させる、(4)国際化を計る、(5)目録・川語など積み残された事項を促進するなどの公約は、前役員・各種委員ならびに全会員の皆様のご協力をいただき、少しずつではありますが果たされつつあると思います。また、専任の学会事務員をおくことにより事務の迅速化とサービスの向上が計られてまいりました。

今回、会員の皆様のご支持を得まして(?)、もう1期会長を務めさせていただくことになりました。私たちの学会が、鳥類を研究材料とする広領域の研究者がそれぞれの分野の研究成果を発表し合い、鳥類を総合的に理解する場となりますように、さらに日本の鳥類学研究が国際的な鳥類学発展の一翼を担っていただけますように、会員の皆様の従前に変わらぬご支援を賜りますことをお願い申し上げます。

最後になりましたが、これまでご協力いただいた前役員および前委員の方々に心からお礼を申し上げます。

関連学術会議

- | | |
|------------|---------------------------------------|
| 2月24日 | 平成7年度山階芳麿賞受賞記念講演会(東京医歯大・本部:本号) |
| 3月17~22日 | 第2回国際モズシンポジウム(エイラト・イスラエル: no.56) |
| 3月28~31日 | 日本生態学会第43回大会(東京都立大: no.57) |
| 4月19~21日 | 水鳥と湿地とリクリエーション:維持管理の実行(ブリストル・イギリス:本号) |
| 6月30~7月4日 | 第13回動物の繁殖に関する国際会議(シドニー: no.55) |
| 8月20~24日 | 第7回国際ライチョウシンポジウム(フォートコリンズ: no.57) |
| 9月2~6日 | 第3回国際ペンギン会議(ケープタウン) |
| 9月18~20日 | 日本動物学会第67回大会(札幌) |
| 9月29~10月4日 | 第6回国際行動生態学会(キャンベラ: no.55) |
| 12月1~8日 | 第9回パンアフリカ鳥学会議(アクラ・ガーナ: no.56) |
- 関連分野の学会大会・シンポジウムに関する情報をお知らせください(〆切:2ヵ月前)
-

英文校閲サービスのお知らせ

中村 浩志

昨年訪れたカナダのプリティッシュ・コロンビア大学で知り合ったC.K.カーチス教授から、英文雑誌に投稿する論文の英文校閲サービスを行いたい旨の連絡がありました。カーチス教授は、現在同大学を退職されていますが、日本の研究者の投稿論文作成を援助したいとのことでした。英文校閲料金は、日本への郵送料を含め1ページにつき、\$2.00(U.S.)ときわめて低料金です。日本語論文につける英文要約の校閲も可能ですので、英文でお困りの方がいましたらこの機会にぜひご利用下さい。希望されます方は、下記のカーチス教授宛に直接送るか、又は私が仲介役をいたしますので中村宛(学会誌の送付先と同じ)にご連絡下さい。

Dr. Charles K. CURTIS, 2466 Haywood Avenue, West Vancouver, British
Columbia CANADA. V7V1Y1

TEL: 001-1-604-925-1251. FAX: 001-1-604-822-4244

1995年津戸基金シンポジウムの報告

「北海道における希少鳥類研究の現況と鳥類生態学研究」

高木 昌興・林 英子

去る11月3日から4日かけて、専修大学北海道短期大学相馬記念館において1995年日本鳥学会津戸基金シンポジウム「北海道における希少鳥類研究の現況と鳥類生態学研究」が44人の参加者を集め開催された。本シンポジウムは北海道で鳥類の研究をしている大学院生が中心となって年2回のペースで開催している「北海道鳥学セミナー」をかねていた。

シンポジウムの一日目は「北海道における希少鳥類研究の現況」というテーマでクマガラ、タンチョウ、シマフクロウの研究に携わっている6人の講演が行われた。

有沢浩氏（東京大学北海道演習林）は「クマガラの生態を探る」の演題で、30数年にわたるクマガラの調査研究からこの種の一年の生活史を詳細に解説し今後のキツッキ類の研究の指針を示した。

正富宏之氏（専修大学北海道短期大学）は「タンチョウの行動」において、ツル科を例にしながら行動全般の基礎的な情報を総括した。また、従来から行われてきたツル科の形態的特徴を用いた系統分類上の属レベルの区分と求愛行動が一致するにもかかわらず、分子系統学的分類は従来の分類と符合しないという興味深い点も示した。

藤巻裕蔵氏（帯広畜産大学）は「ロシア極東南部におけるシマフクロウの生息環境の一

例」で、ロシア極東南部の生息環境を3例紹介し、シマフクロウの研究者間で情報交換が行なわれた。

早矢仕有子氏（北大応用動物）は「シマフクロウの行動圏と出生地からの分散」でテレメトリー調査からシマフクロウの若鳥の分散過程、分散の雌雄差などについて講演した。そこで、生息地の分断化や近親交配の問題に触れ、具体的な保護策への示唆を行なった。

竹中健氏（北大地球環境研）は「シマフクロウの餌推定」でシマフクロウの減少要因を様々な側面から分析した。加えて、多くの河川における魚類の密度推定、バイオマスの算定を行ない餌環境からシマフクロウの生息条件を解明した。

また、偶然北海道に滞在していたロシアの鳥類研究者であるアンドレーエフ氏（Institute of Biological Problem of the North）が飛び入り参加で、「極東域のシマフクロウの分布域」において、既存の文献にはないシマフクロウの分布域を紹介した。

2日目は「北海道における鳥類生態学研究」というテーマで以下の3題が講演された。

高木昌興（北大応用動物）は「モズにおける営巣場所選択の季節性と繁殖成績の季節性」の前半で営巣場所選択が営巣植物のフェノロジーと巣の捕食圧の季節変動で説明できるこ



とを紹介した。後半では繁殖開始のタイミングと一腹雛内の体重の分散の関係から早期繁殖が有利であることを示唆した。

小高信彦氏（北大地球環境研）は「アカゲラの一妻多夫と種内托卵」において生息環境内の都市化、および樹洞営巣性の鳥類との種間関係に着目してアカゲラの一妻多夫と種内托卵を解明する試みを紹介した。

樋口亨軌氏（帯畜大野生動物）は「エゾライチョウの生息と森林植生の関係」でセンサスによってエゾライチョウが生息している森林としない森林を区分し、生息場所の植生構造の特徴を解説した。

本シンポジウムにおいて北海道における鳥類研究者が一同に会し、希少鳥類に関して論

議できたことは、保全生物学的観点から意義深い集いになったと思われる。また、研究者間の研究交流と親睦にも大きく貢献でき、北海道鳥学セミナーとして研究交流を続けていく上でも良い刺激になった。

最後に会場、宿泊の手配など様々な点において御尽力をいただいた専修大学の正富宏之先生に紙面を借りてお礼を申し上げたい。

付記：次回の北海道鳥学セミナーは帯広畜産大学野生動物管理学研究室を事務局として1996年3月9・10日に開催される予定です。興味をお持ちの方は、

今回の事務局0155-49-5115（内線5503）まで連絡をお願いいたします。

（北海道大・農・応用動物）

第14回日本動物行動学会印象記

永田 尚志

日本動物行動学会は、12月3～5日の3日間、兵庫県三田市の人と自然の博物館で開催された。つくばで開催した第11回大会に参加して以来なので、じつに3年ぶりに動物行動学会に参加した。まず、個人的なことで申し訳ないが、つくばに職を得てから主に群集生態学、保全生物学に主眼をおいた研究を行ってきたので、行動学会の敷居が少し高くなってしまった。前回は、主催者側であったので学会をゆっくりと楽しむことはできなかったが、今回は久しぶりに楽しめたと思う。最近でこそ鳥学会も若い大学院生の参加者が少し増えたが、行動学会の参加者はあいかわらず若い院生が多く活気にあふれていた。行動学会は設立当初から、ポスター発表とビデオ発表を学会発表に積極的に導入し、生態関係の学会でのポスター発表を流行らせたばかり、鳥学会に比べて質の高いポスター発表が多かった。しかし、その一方でプレゼンテーションのしかたが悪く、論点のはっきりしないポスターもいくつかあった。内容もプレゼンテーションも拔群な発表がもちろん理想であるが、人を説得するには、最低限、論理だったプレゼンテーションが必要であることは言うまで

もない。午前中をポスター発表に割いて、ゆっくりとプログラムを作ってはあったものの、発表数が多くて聞けなかったポスターも結構多かった。今回の講演要旨を眺めてみると純粹にエソロジカルな発表は影を潜め、繁殖戦略、血縁選択等の行動生態学的な発表が大半を占めている。動物心理学の分野からの発表が以前より減少したのは若干気にかかるが、ヒューマンエソロジー、動物心理学、神経行動学的な発表も散在しているところが行動学会らしい。発表を扱っている材料別に見てみると、昆虫を主体とした陸上節足動物が最も多く全体の約3分の1を、サル屋の発表が多かったため哺乳類（ヒトを除く）が全体の約4分の1を占めていて、鳥類関係の発表は12題（11%）にすぎなかった。一昨年参加した国際行動生態学会では鳥類を材料とした発表が4割を越えていたのを考えると日本での鳥類研究の現状はなんとなく寂しい気がする。現在、鳥学会では発表の大部分が生態学に偏っているので、心理学的、ニューロエソロジカルな研究がもう少し増えてもよいのではないかと思う。鳥類は、感覚が人間に近く（最近ではそうでもないという事実が出てきたが）、

実験への反応も早いので行動研究には最適な材料であるといわれているので、この分野への進出を期待したい。最後に独断ではあるが私自身が興味深かった発表は、DNA解析を用いたエゾヤチネズミの婚姻システムと家系解析およびオオヨシキリの性比の解析、確率

的ダイナミックプログラミング (SDP) を用いたアオサギの意志決定モデル、ヒガシカワトンボの翅型ESSの人為的選択実験、結果がポジティブでないのは気になるがクジャクの性選択とFAの関係等である。

(国立環境研・地球G・野生生物)

第18回極域生物シンポジウムに参加して

新妻 靖章

12月7・8日の両日、東京の国立極地研究所において第18回極域生物シンポジウムが開催されました。極域生物シンポジウムということもあって、ほとんどの講演が極域に関するもので、場違いのところに来てしまったのではないかと思われました。しかし、鳥学会でも私の研究は場違いの分野なのだから、どうせ違うのならばもっと極端に違うほうがおもしろいだろうと考えなおしました。シンポジウムは陸上生物セッションと海洋生物セッションの大きく二つに分かれており、さらにポスター発表がそれぞれのセッションに含まれていました。このポスター発表の分野が多岐にわたり、11のセッションからなりおおよそ極域とは結びつきそうにないと思われる発表もいくつかありました。とりわけ私の発表した海鳥・大型動物セッションはその中でも異質でした。というのも、発表にあった海鳥ウトウ、ウミウ、コシジロミツバメはいずれも極域には分布していないからです。しかし、海鳥類は海洋生物として海洋生態系の重要な構成員であり、極域には多くの海鳥が生

息しているのだから、他地域での海鳥の生態学的、あるいは生理学的研究は極域における研究にも参考になるだろう。今回のシンポジウムは他地域での研究からの参加となりましたが、国内の海鳥類の研究者（ほとんどいないのが現状ですが）が多く集まり、また海洋生物、とりわけコシジロミツバメの餌量生物である動物プランクトンなどの研究報告もある極地研シンポジウムは私としては得るのがたくさんありました。鳥類の講演は全体の10分の1にも満たない量でしたが、学会員のほとんどが主に生態学やその周辺領域にしか関心を寄せない鳥学会よりも、生態学周辺分野以外の研究者（鳥類を材料としていない）たちとも活発な議論ができ、有意義な時間を今回の極地研シンポジウムに参加することによって過ごすことができました。鳥を材料としているからと情性で鳥学会に参加することをやめ、これからは研究について議論できる鳥学会に改革できたらと思います。

(北海道大・農・応用動物)

1996年度日本鳥学会沖縄大会のお知らせ

本年度の大会は9月14日(土)、15日(日)、16日(月)に沖縄県宜野湾市の沖縄国際大学で開催されます。シロガシラ、ズアカアオバト、イソヒヨドリをキャンパス内で観察しながら、新築されたばかりの校舎で会員の方々の研究発表とたくさんの参加を期待しています。アカハラダカの渡りや山原(やんばる)の鳥たちの探鳥会も計画しています。

大会の問い合わせ、申し込みは

〒901-22 沖縄県宜野湾市宜野湾276-2 沖縄国際大学内 宮城邦治宛

日本鳥学会1996年度沖縄大会準備事務局

T E L : 098-892-1111 (内線7611) 直接098-893-7354 (大会準備委員長: 宮城邦治)

F A X : 098-893-3276

(詳しい大会案内は次号に掲載予定です)

東京大学大学院野生動物学研究室

樋口 広芳

私たちの研究室は、1 昨年 (1994) の 6 月に、東京大学大学院農学生命科学研究科応用動物科学専攻分野の 1 研究室として新設されました。名称からおわかりのように大学院専門の研究室で、野生動物の生態、行動、保全などを研究・教育の対象にしています。教官構成は教授 (樋口)、助教授 (高槻成紀)、助手 (宮下 直) の 3 人で、大学院生などは現在、修士および博士課程の院生が 5 人、研究生が 1 人、海外からの留学生が 2 人、特定の研究テーマをもった研究者が 1 人います。今年の 4 月からはさらに院生が 8~9 人、加わる予定です。

研究内容を紹介しますと、私は希少鳥類の生態と保全、托卵鳥の生態と行動、サギやカラスの学習と文化伝達、人工衛生を利用した渡り鳥の追跡などに関心をもっています。高槻先生は、シカやカモシカの生態と保全に関心をもっており、主に宮城県の金華山や岩手県の五葉山でそれら大型哺乳類と植生との関係について研究しています。宮下先生は、節足動物の生活史の進化に興味をもっており、とくにクモ類を対象にして研究を進めています。大学院生の研究テーマは、鳥類を対象にしている人のものを紹介しますと、湿地の規模や種類と鳥類群集との関係、ツバメの生態分布の決定要因、カワウの分布拡大や個体数増加の原因、イジママシクイの囀りとなわばり分布などです。

大学院の研究テーマは、野生動物の生態、行動、保全などにかかわるものであれば、対象動物、対象地域を含めて自由に選んでよいことにしています。ただし、決める過程では、研究の可能性や発展性などについて教官と十分に相談することになっています。いくらすばらしい構想をもっている、時間や労力面から、あるいは経済的な理由から実施できないことがあるからです。また、これまでの研究内容がよくても、先々どう発展させられるのか見通しが立てられない場合もあるからです。

大学院の試験には 2 種類あります。一つは、学部の卒業予定者あるいは卒業した人が受験する通常のもので、もう一つは、社会人特別選抜という制度に基づくもので、すでに研究機関に所属している人が、その機関に属したままで大学院にも所属するためのものです。試験の内容は若干異なりますが、入ってからの扱いは同じです。社会人特別選抜の場合には、受験するにあたって、所属する機関の長から入学後の処遇について承諾を得ておく必要があります。

私たちの研究室は、設立後まだまもないこともあって、とても活気に満ちています。教官も院生も野外調査を活発に行っているので研究室にはいないことが多いのですが、演習が 2 週間に 1 回、輪読会が 2 週間に 1~2 回、セミナーが月に 1 回あります。演習は院生が自分の研究計画や成果を発表したり、すぐれた内容の論文を紹介する場で、研究室の構成員全員が参加対象になります。輪読会は若手の研究者が中心になって自主的に実施しているもので、生態学や進化生物学関係の本を読んでいます。セミナーは一般公開で、国内外の研究者を招待して講演してもらっています。

私たちの研究室は、鳥の生態研究を行なうことのできる日本では数少ない大学の研究室です。私はいろいろな動物や研究テーマを対象にする人がいたほうがおもしろいと思っていますので、とくに鳥にこだわるつもりはありませんが、もちろん、すぐれた鳥類研究を行なってくれる意欲ある学生を望んでいます。私たちの研究室に関心のある方は、下記までご連絡ください。

〒113 東京都文京区弥生 1-1-1

東京大学大学院農学生命科学研究科
野生動物学研究室 樋口 広芳
電話 03-3812-2111 (内線7541)

《国際鳥学セミナーについて・ご意見の募集》

石田 健

今年の9月に国際鳥学セミナーが開催されます。昨年の大会でお知らせしましたように、アメリカ・ヴァージニア工科大学のジェフリー・Rウォルターズ博士を招待することになりました。氏は、霊長類の研究歴もあり、保全生物学的にも行動生態学的にも興味深いホオジロシマアカゲラを長年研究され、近年は生態学的な理論の保全生物学への応用について率先して議論を展開されています。保全生態学をめぐって日本の研究者と議論することに、たいへん興味を示され積極的に応対してくださっています。

今回のセミナーも、従来どおり今年度大会（於、沖縄国際大）の日程に合わせて開催します。特に、沖縄の山原においてノグチゲラやヤンバルクイナという実際の対象を目の前にしながら、市民参加を得た実践的なシンポジウムの開催を1つの柱にします。このシンポジウムについては、セミナー委員の花輪伸一さんと大会実行委員長の宮城邦治さんたちを中心に、企画を進めます。

企画運営を任せていただいた私としては、シンポジウム全般を通じて「保護に関する実

践的な雰囲気での進化・生態学的な理論に取り組む」ようなものにしたいと考えています。ウォルターズ氏とも相談しながらさらに計画を練ります。現段階では、山原以外での企画は決めておらず、環境庁などの方たちの参加を望みやすい東京近辺でのシンポジウムと、積極的な受け入れ体制を表明され環境もよい北海道（大学）での勉強会を有力候補にしています。その他に、前回の東京大学秩父演習林での2泊のセミナーがたいへん充実していたので、沖縄・本州間での船上セミナー（2泊）などという一石二鳥？の企画の実現可能性を探ったりしています。

そこで、学会員のみなさんからもセミナーの企画についてのご意見や発案を寄せていただきたいと思います。上記の方針や企画、船上セミナーに対する賛否、セミナーの具体的なやりかたや国内招待者などに関する発案、開催地の希望（あまり添えないかもしれませんが）などお寄せください。

（東京大・秩父演習林）

連絡先：石田健 〒368 埼玉県秩父市日野田町1-1-49
東京大学秩父演習林
e-mail: ishiken@tuft.u.f.a.u.tokyo.ac.jp

学術集会のお知らせ

平成7年度山階芳麿賞受賞記念講演会

主催：山階鳥類研究所

日程：1996年2月24日(土) 午後1:30～5:00 (受け付けは1:00～)

場所：東京医科歯科大学本部1号館9階特別講堂（東京都文京区湯島1-5-45）

交通：JRお茶の水駅から徒歩2分

営団地下鉄・丸の内線お茶の水駅から徒歩1分

内容：平成7年度山階芳麿賞受賞者講演「鳥と人の将来 ― 研究と保護 ―」

財団法人山階鳥類研究所 所長 黒田長久 博士

パネルディスカッション「鳥類の研究・保護から共存への道」

パネラー 市田則孝 勲 日本野鳥の会 常務理事

黒田長久 勲 山階鳥類研究所 所長

増井光子 世界水族館会議 参事（前上野動物園公園園長）

山岸 哲 日本鳥学会 会長（大阪市立大学教授）

対象：一般 参加人数 100名。当日、会場受付で、先着順。

参加費は無料。詳しくは下記までお問い合わせ下さい。

山階鳥研・広報室（杉森・石本） TEL：0471-72-1101 FAX：0471-82-1106

水鳥と湿地とリクリエーション：維持管理の実行

イギリス鳥学会1996年春期会議、水鳥と湿地とリクリエーション：維持管理の実行

(Waterbirds, wetlands and recreation : putting sustainability into practice) が水鳥・湿地トラスト (The Wildfowl & Wetlands Trust) と共同して、WWTの50周年祝賀会の一部として、開催される。この会議はイギリスのブリストル (Bristol) 大学で4月19～21日の日程でおこなわれる。水鳥と人の双方にとっての湿地の価値を考える。特にリクリエーションとしての湿地利用にまつわる問題に焦点を当てる。サーキュレーションについてのお問い合わせは下記まで。

Louisa Beveridge, The Wildfowl & Wetlands Trust, Slimbridge, Gloucester, UK
TEL : +44-1453-890333、FAX : +44-1453-890827

お 知 ら せ

【編集委員会】

学会誌原稿送付先変更のお知らせとお願い

鳥学会役員の改選に伴い、今年1月から鳥学会誌への投稿原稿送付先が下記に変更となりましたのでお知らせいたします。また、学会誌の編集陣には今年から樋口広芳氏が新しく加わり、中村浩志・江口和洋の正副編集委員長ほか計11名で取り組むことになりました(1頁参照)。

学会誌のいっそうの充実に向けて努めていきたいと思っておりますので、会員の皆様の積極的な論文の投稿をお願いいたします。また投稿論文作成等の相談にも大いに取り組んでいきたいと思っております。遠慮なく編集委員に直接ご相談下さい。なお、原稿送付される場合、封筒の表に「鳥学会誌投稿論文在中」と朱書下さい。(編集委員長 中村浩志)

送付先 〒380 長野市西長野 信州大学教育学部 中村浩志

TEL:0262-32-8106 FAX:0262-34-5540 (研究室)

TEL:0262-53-4351 FAX:0262-53-4352 (自宅)

【事務局】

○淀川におけるオオヨシキリ調査グループ(代表 山岸 哲氏)より、180,000円の寄付を頂き、学会誌44巻3号の印刷費の一部にあてさせていただきました。

紙面をかりて感謝します。

○小林広幸氏、宮城富雄氏、亀井陽太郎氏、中島 昭氏(各1,000円)、新田茂氏、谷口一夫氏(5,000円)、与那城義春氏、行村 純氏(各10,000円)より、鳥学会基金へ寄付を頂きました。

紙面を借りて感謝します。

○鳥学ニュースの編集が次号から江崎保男さん、水田拓さんのコンビに代わります。

西海 功さんご苦労様でした。

鳥学ニュース No.58

1996年2月10日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪立大学理学部 動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522 郵便振替口座 00110-0-6599

発行人 山岸 哲

印刷所 丸九印刷

編集 江崎保男・西海 功